

環境考古学の調査協力

金海会峴里貝塚

韓国釜山の西に接する金海市街地の独立丘陵に金海会峴里貝塚があります。この貝塚は隣接する鳳凰台遺跡とあわせて国史跡に指定され、鳳凰洞史跡公園として整備中です。貝塚近くには支石墓があり、史跡内には竪穴住居、高床式倉庫、佐賀県吉野ケ里遺跡を思わせる高殿建物も建てられ目を引きます。

今回の会峴里貝塚の発掘は、貝層展示施設の建設のため、金海市の委託により(社)慶南考古学研究所が2005年2月からおこなっているものです。私はその研究所から環境考古学的分析の協力依頼を受け、3月から8月にかけて4回、現地を訪問し、発掘指導および分析試料の採取に協力しています。

会峴里貝塚はマガキ、ハマグリを主体とする鹹水(海水)性貝塚で、大河、洛東江が作り出した広大な沖積地を見下ろす西の丘陵上に位置します。この貝塚は戦前、主として日本人による発掘が8回おこなわれ、なかでも1920年の京都帝国大学の浜田耕作と梅原末治や、後に奈文研の平城調査部長を務めた榎本亀治郎による1934年の発掘がよく知られています。戦前の発掘で貨泉(王莽が建国した新(A.D. 8～23年)が铸造した銅銭)や、灰色の硬い新羅焼きの土器も出土することから、紀元1世紀～4世紀にかけての年代が推定されてきました。

戦前の発掘でも貝層が4m以上堆積していることがわかっていましたが、今回は、その隣接部に一辺10m、幅1.5mほどの「コ」の字形のトレンチを入れて発掘しました。貝層を形成するカキは30cmを越える大きなものが多く、ハマグリも現代ではなかなかお目にかかれない大型のものばかりです。その他にアカニシやレイシ、バイなどの巻貝や、イガイ、オキシジミなどが少量含まれています。発掘が進むにつれ、貝層はさらに深く堆積していることが明らかになり、とうとう8m以上にも達しました。トレンチの上にはテントをはり、トレンチ内には4階建ての足場を組んで貝層の実測やサンプリングをおこなっています。貝層は5～10cmほどの層が100層以上に分かれて堆積していることが観察できます。

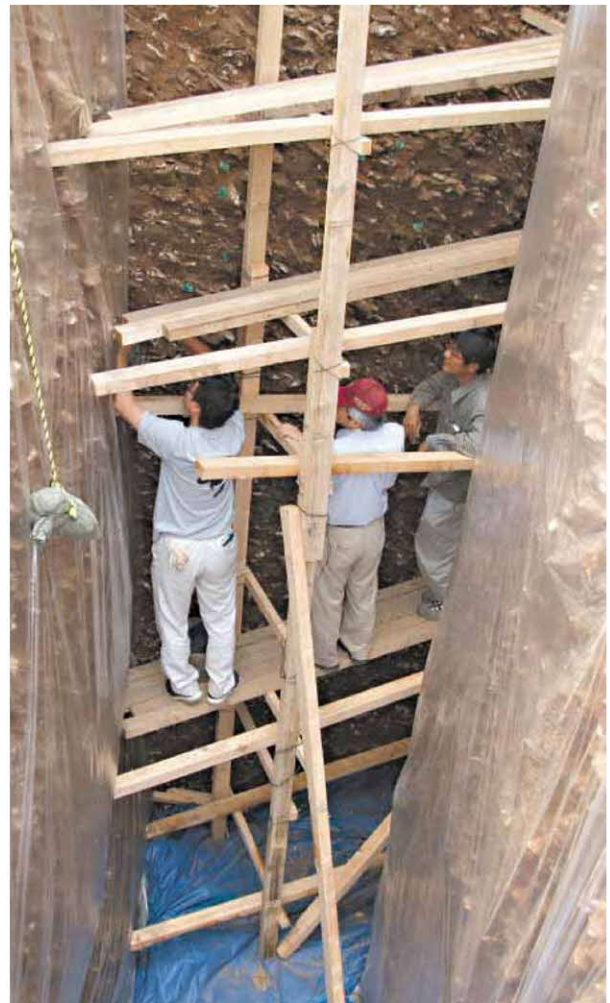
5月には名古屋大学の中村俊夫教授と共に貝層断面から貝殻、炭化物などのAMS放射性炭素年代測定のための試料を採取し、フローテーション法など

の指導をしました。8月には奈良教育大学の金原正明助教授らと共に、花粉、珪藻、寄生虫卵、プラントオパールなどの分析用の試料を採取しました。

貝層は金海式土器が主体で、砥石を除いて石器はほとんど見られず、鹿角製の工具柄には、鉄器の基部が残ったものもあり、青銅器は見られず、すでに利器が鉄器に置きかわっていたことを示します。

貝層の下層から上層を通じて、鹿角の切断には、鋸が多用されており、韓国における鋸の使用が日本よりも200～300年古くなることを示しています(日本での鋸の使用は、松山市宮前川遺跡群の3世紀の庄内式土器を伴う竪穴住居床面出土の骨角器が古い例)。動物はニホンジカが多く、小型のシカ科であるノロやキバノロがわずかに含まれます。イノシシ、またはブタは少数で、現在、DNAや炭素・窒素同位体による食性分析により野生か飼養されていたかの分析をおこなっています。イヌも出土しましたが、縄文貝塚のように埋葬されたものは無く、散乱状態でした。

(埋蔵文化財センター 松井 章)



貝層から放射性炭素年代測定用のサンプルを採取中
2005年5月松井撮影